本寺藤澤淨光寺々領
高千七百六拾石

本寺天童佛向寺
本寺羽州新庄領黑瀧向
川寺々領高貳百五拾石

本高六日町行藏院

○手　之　部

本寺野州大澤圓應寺

時宗遊行派寺町
光　明　寺

同宗一遍派鐵砲町
向　泉　寺

三日町
光　禪　寺

眞言宗修驗
當山形旅籠町
金　剛　院

淨土宗六日町
天　然　寺

禪宗北肴町

本寺皆川町龍門寺
本寺奥州岩城長源寺米
百俵城主より年々助る

本寺武州久米川梅歲寺

本寺寶憧寺

○安　之　部

本寺鐵砲町寶光院

○左　之　部

本寺天童佛向寺

傳　昌　寺

同宗七日町
長　源　寺

同宗松原村
長　秀　寺

眞言寶憧寺地中
長　善　寺

天臺寶憧寺地中
安　住　院

淨土宗小姓町
西　念　寺

淨土眞宗本派寺

同斷　寺町西稱寺

來呼院配下　八日町三光院

本寺天童佛向寺　小白川村一遍派

○喜之部　西光寺

本寺山城國醍醐三寶院　眞言修驗當山派

熊野社領高百五拾石　六日町行藏院

本寺地藏町寶憧寺　眞言宗十日町

吉祥院

本寺宮町成就院　眞言宗宮內

吉祥寺

行藏院配下　塗師町

歸命院

○由之部

本寺京都西本願寺　淨土宗本派

本寺山州醍醐三寶院八　小姓町明善寺

幡社領之內高貳拾八石　眞言修驗當山派

同斷　鐵砲町明覺院

同斷高五拾參石　同斷

○志之部　明秀院

本寺京都東本願寺　淨土眞宗本派寺町

心緣寺

同宗同所

本寺同斷　淨現寺

同斷

同斷　正願寺

同斷　淨善寺
本寺京都御室仁和寺
眞言宮町
両所抱況
成就院
同宗小姓町
本寺地藏町寶憧寺
新山寺
社領之高六石八拾九石之内百貳拾九石社人とも廿壹人領
同宗宮町
本寺宮町成就院
實相院
禪宗同所
本寺佐倉領半郷安泰寺
慈光寺
同宗諏訪町
同斷
常林寺
同宗上町
本寺龍門寺
松岩寺

同斷寺派高參拾石
同宗龍門寺地中
正覺寺
本寺三日町光禪寺
同宗上町
正德寺
本寺光明寺
時宗遊行派
光明寺地中
本寺天童佛向寺々領
正福寺
高參拾貳石
同一遍派三日町
本寺奥州岩山崎專稱寺
正明寺
寺領高百石
淨土宗材木町
常念寺
同宗諏訪町
成願寺
同斷
同宗加千町
本寺奥州矢目如來寺
淨光寺

京都吉田神祇官領分部
家派八幡社領内高貳百五拾九石

本寺奥州山崎專稱寺
本寺材木町常念寺
本寺藥師町柏山寺
阿彌陀堂領
本寺愛宕山長床坊
本寺鐵砲町寶光院
本寺京都妙心寺

八幡神主
神保頼母
淨土宗寺町
壽泉寺
同宗材木町
實相寺
天臺宗御城内
正樂寺
同宗小白川村
新白雲寺
同宗寶光院地中
淨信院
臨濟宗鐵砲町
勝因寺

同斷
本寺江州身延山久遠寺
本寺六日町行藏院
行藏院配下
同斷
同斷
同斷

同宗五日町
靜松寺
日蓮宗八日町
淨光寺
眞言修驗當山派
百姓町
正本寺
宮町
正光院
十日町
積善院
材木町
正覺院
下條町
清靜院

來呼院配下
同斷
同斷無住

○惠　之　部

本寺々町專稱寺
同斷

三日町　三藏院
六日町　秀藏院
八日町　常學院
三日町　聖德寺
淨土眞宗本派寺町　圓滿寺
同所同斷
圓德寺
同斷寺町

同斷
本寺京都西本願寺
本寺地藏町寶憧寺
本寺宮町成就院
本寺々町來迎寺

○茂　之　部

本寺京都羽黑山寶前院
山王領高八石

○勢　之　部

圓壽寺
同宗西派六日町
圓祥寺
眞言宗寶憧寺地中延命院
同宗宮町
延應寺
新山村淨土宗
延福寺
天臺修驗羽黑派八日町文性院
眞言宗三日町

本寺寶憧寺阿彌陀領高拾四石

本寺龍門寺　誓願寺

本寺七日町長源寺　禪宗北肴町

本寺羽州新庄瑞雲院　青林寺

本寺京都東本願寺々領拾四石　同宗旅籠町

本寺專稱寺　石泉寺

本寺京都西本願寺　同宗長谷堂村

清源寺

寺町

專稱寺

同宗同派同町

善龍寺

同宗西派南館村

善福寺

淨土宗小姓町

本寺奥州矢目如來寺　專念寺

本寺材木町常念寺　同宗諏訪町

專光寺

行藏院配下　北肴町

泉妙院

同斷　下條町

千手院

八幡社人

拾九石　武田藏人

拾四石　横山藤右衛門

拾五石　松田大炊

両所宮社人百二十石ヲ二十一人ニ而配分

木村傳治　青木富吉

行司十三郎　長岡右京

長谷川造酒　柴田民部
田所帶刀　石倉幸吉
原田式部　五嶋右膳
金澤儀三郎　長岡民彌
藤澤左門　黑見主膳
中野郡司　鬼澤大進
佐藤濟定　齋藤多門
田中多中　田所八郎
佐藤求馬

社僧

一明院　花藏院
十二ヶ寺・印之分御懇意ニ付新御殿エ罷出ル
光明寺　寶憧寺
成就院　柏山寺
寶光院　專稱寺
行藏院　法祥寺
龍門寺　光禪寺
長源寺　常念寺

外に

神保賴母

右者御目見之節獨禮也

內御堂　威德院
如法寺　護摩堂

右四ヶ寺は獨禮御目見被仰付取次方は並寺院同樣取計候事

申合

一御取次方月番順相定候に付御者頭両役之者え申談左之通

一御者頭方月番之節一所に相當に候はば御取次御操替被下候事

一寺社方月番之節同斷之事

一新役被仰付候節虎口へ順相定候事
一火方改方に而は御取次月番相勤候事
一御觸御請等同役一統申上候事被仰出恐悦等銘々罷越候事
但譬被仰出と有之候ても文儀之被仰出は月番に而相勤候事
一御歸城之節新御殿へ當番三人内御者頭一人罷出申談相勤候事文政十二年より御者頭御用多に付御取次方計申談相勤候様に取極り候
但御參府之節は御取次三人申談相勤候事
一夏足袋相伺は月番に而取計内書相認差上可申事尤大目付へは一紙に相認差出可申事
一御席觸參り候節御一列御鑓奉行御者頭寺社奉行へ御締方御役名への世話番に而罷懸け他席へ順達可申事
一世話番順達は晦日之夕方までに致順達候事
一廻文差出候は端地無之相認可申候尤様の字相用申事
一御在城中新御殿當番両役之者相詰候節萬一變事有之候節御者頭方に而出役之節は一役御取次之御方御知せ被下候様兼而御斷之上取極置候事

一御在城中御取次新役被仰付候節一日爲見習新御殿へ相詰罷出候事
但御留守中御役被仰付候者は不及見習事
一正月九日大般若執行に付寶憧寺登城之節は御寺詰順に而相勤候事尤御在城中は當番順に而相勤候事

福井三四郎
根岸惣兵衛
田中忠

右者寺社奉行相勤候に付寺院取次は御用捨之事
一御取次出順御者頭方役引に不拘以來星順を以罷出事
一下方火之番相勤候者御寺詰順相當り候者賴合御寺詰に罷出候事
右之通寛政十二庚申年十一月月番蟻川角之進殿宅に而寄合申談以來取極

文格

改年之御吉慶不可有際限御座奉存候殿様益御機嫌能被遊御座御超歳恐悦至極奉存候御年始之御祝儀爲可申上捧愚札候恐惶謹言

御同役連名

正月二日

左七様　　實名据判

參人々御中

但御月番年寄中之節御連名御老中は御名相除く

右之通御同役連名關口喜兵衛殿は一列之方に而御差出太田氏は御旗奉行路(格カ)に而被差出候間相除く

改年之御吉慶不可有際限御座候御勇健被成御超歳目出度御儀奉存候御年始之御祝詞爲可申上呈愚札候

恐惶謹言

御同役連名

判

正月二日

年寄中御連名

參人々御中

右之通に而關口氏太田氏相除右同文言

以愚札如斯御座候恐惶謹言

御同役連名

判

正月二日

御中老御名

參人々御中

新春之御吉慶不可有休期御座候彌各様御堅固被成御超歳珍重奉存候御年始之御祝詞爲可得御意如斯御座候猶期永日之時候恐惶謹言

御同役連名

判

正月二日

御同役連名

但様也

一筆啓上仕候今般樋山右近殿御事御使役御本役被蒙仰年々銀五枚宛被成御頂戴重疊目出度御儀奉存候

右御歡爲可申上呈愚札候恐惶謹言

御同役連名

判

五月廿六日

高　文左衛門様

參人々御中

一筆啓上仕候寒冷之節御座候處先以御道中彌御勇健被成御着府珍重之御儀奉存候右御歡爲可申上呈愚札候恐惶謹言

十一月　　御同役連名

下　左太夫様　　判

參人々御中

一矢貝氏着歡狀岡谷氏樋山氏各相除候事

一筆致啓上候春寒之節御座候得共彌御堅固被成御勤珍重奉存候然者今般私儀不存寄御取次役被仰付難有仕合奉存候不調法者之儀以來御添心奉願候此段可得御意如此御座候恐惶謹言

正月　　持田十兵衛

江戸　　實名判

御同役連名

參人々御中

貴札致拜見候今般於御前御取次役被蒙仰重疊目出度奉存候依之御吹聽被仰越之御紙面之趣入御念候御事御座候右御歡可得御意如斯御座候恐惶謹言

月　日　　何　様　　名

御報

出勤之節同役へ廻文

私儀風氣全快致し候間今日出勤仕候此段得貴意度如此御座候以上

月　日　　名

御同役中様

乍御世話御順達可被下候以上

御法事に付御寺詰一件

文政五壬子年七月八日九日於泰安寺大隆院様十三回御忌御法會有之依而先例勤書或は古役之口達增補して認之

一御觸相廻る左之通

來る八日九日於泰安寺大隆院様十三回御忌御法事有之候間右兩日之内參拜可被有之候

一御香奠之事別紙割合書付之通來る五日迄に勘定所へ可被差出候

一並御香奠之外御靈前へ輕き品献備且又御法事中被相詰度輩は同席同列有之面々は被申合來る六日迄可被差出候扨又家内親族之内御由緒に而別に献備物被仕度面々有之候は是又書付來る六日迄可被差出候

一右に付惣御位牌大師堂へ被爲移候間來る五日御佛參之儀は大師堂に而參拜可被有之候右之通可被得其意候

七月二日

給人　岡谷三太夫
中小姓　高山傳右衛門
醫師　下江彦太夫
各中

御香奠割合書付略す

三日

一月番下江新八郎方より以廻狀申來り候は此度御法事に付御香奠さし出候様割合書付相添持廻りに而取集に罷越す

私曰御取次同役之内に而も御用人格或は御一列之仁は向方に而被申合別に被差出候事與被存候既に蟻川氏岡村氏抔之割合相見へ不申候

御香奠御取集候者勘定所出役之徒目付へ差出候事

一御取次月番下江新八郎廻文を以御取次役へ來る八日九日大隆院様十三回御忌御法事有之候に付申合御取次可被相勤候

一來る八日九日御法事中例之通帳役可被差出候

七月四日

右御書付御用番傳右衛門殿御渡被成候由依之御帳役へも御沙汰之趣申渡候由右に付御寺詰一多賀谷助太夫様御控一權田理兵衛様一村山勘解由様一下江新八郎様一福井源次兵衛様一岡村辨吾様

右之通御順に付被仰合相勤候様申來る

一右者御取次方月番簞笥へ成役順帳面有之尤御參府中於御本丸大般若爲轉讀寳憧寺例正月九日罷出候に

付其節御取次より相交出役いたし候事

但御在城中大般若之節は新御殿當番順に而相勤る

一御者頭方火方火之番但寺社奉行右者順相除候事

當時は火方懸り火之番も御寺詰相勤候事尤其節者火方火之番相賴候而御寺詰に罷出候事

一寛政十一己未年五月廿四日化城院様二十五回御忌御法事に付新美左兵衛其節火方懸り被相勤居候得共格別之御由緒有之候に付献備物御寺詰之儀御伺之處相濟候間火方御賴合御寺詰被罷出候此節山瀨新左衛門殿火之番相勤被居候得共是又御懇命被蒙候事故御賴合に而相對替に而御寺詰被相勤候

一月番宅へ御帳役罷越候節以前之下た帳貸遣し可申事先格也御帳認方有末

私曰當時御帳役本役有之候間御帳爲見候に不及候

一御用番傳右衛門殿へ左之書付月番新八郎差出候由但賴に而被罷出候仁は名前かた書に願は相記出す先例也

御寺詰覺

御逮夜朝詰　御同日夕詰　御當日朝詰

村山勘解由　多賀谷助太夫　下江新八郎

控權田理兵衛　福井源次兵衛　岡村辨吾

右者先例也但御逮夜御當日詰之儀に而三人申合闔取に致し候尤闔に極候儀に而は無之最初案内之節月番取計に而出順に朝詰夕詰之儀取極書付に致し廻文差出候而も宜候由

一月番取計に而相詰候者名前并何日朝詰夕詰之儀端紙に相認御勘定奉行へ差出候事其節相詰之刻限之儀問合可申事定而向方より案内申越挨拶可有之候并草履取支度札之儀も三人出役之節は三枚月番に而受取出役之仁へ相渡候事

一御寺詰出役に付右以下に而は御貸人若黨之儀一人刻限之儀書付に致し御勘定奉行へ自身差出候得者向方より被仰付候

一格別御懸命之者献備物御寺詰伺書

口上覺

私儀何院様御側向相勤格別之蒙御厚恩候に付爲冥加御靈前へ輕き品献備仕御法事之節御寺詰仕度奉存候此後奉伺候以上

月　日　何之誰

右上包折掛口上覺何之誰と記月番伺書差出御聞屆相濟爲御禮御用番へ罷越候事

七日

一勘定所より端紙に御法事に付明八日九日泰安寺へ出役之御中小姓以上名前相認刻限之儀案内有之朝詰之者へ朝六つ半時夕詰之者は晝四つ半時より相詰候様申來る依之名一點を懸け出す

御逮夜朝詰心得

八日

一麻上下紋付帷子着用若黨一人草履取一人召連罷出泰安寺中の口より上り向に左之方御使者之間又溜之間とも云是へ刀を持込居候

一御帳役罷出候趣相屆る居所は玄關へ徒目付帳役列候其次へ罷在候事尤御帳硯箱等並置候事

一御年寄中大師堂へ御出有之候様子に候はば見計候而役方へ罷越先刻より罷出候趣御屆申上候事

但若黨は直に最初供歸り申付九つ時前罷越候様申付置中間支度札兼而相渡置勝手へ世話致し候彼人居可申上候受取懸合候様申聞る勘定所御賄所に而支度出候趣承り候

一殿様奥様長壽院様等御備物之儀御帳へ爲相認候事ゆへ何之御品に候哉之趣御參府中は兼而勘定奉行へ問合書付受取置候事御在城中は御用人中持に付彼方へ承り合候事尤當日に差懸り候而も不苦候相知可申候右書付御帳役へ相渡す末に有

一暫く程合有之御齋出に頂戴

私曰小辨當箱以來持參之事

一御法事始り之半鐘合圖に水手遣置帶劍幷扇子も差御本堂敷居際に而中座御位牌正面に而又中座詰前へ着座之事

但御年寄中御出無之前相詰候事

獨禮以上

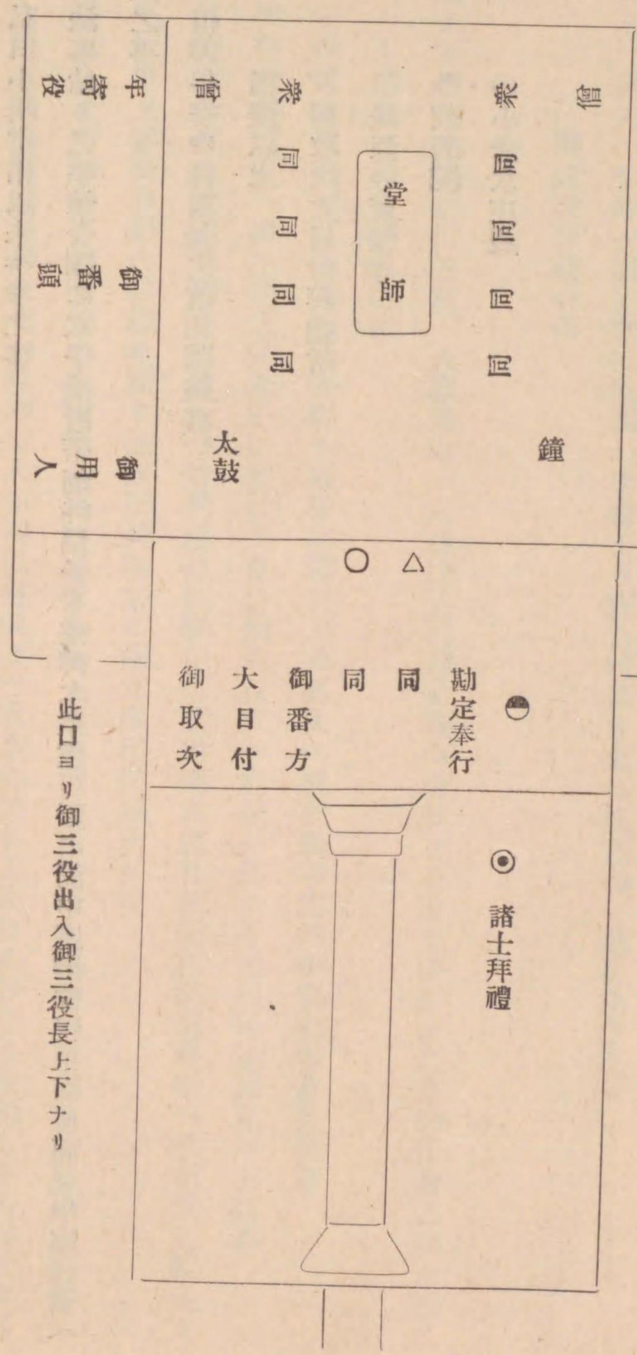
△御取次大目付拜禮所

○長源寺寶憧寺

◓般若院

◉小清水庄藏

御位牌



一大目付之内に御取次より席宜仁々（有カ）之候共御取次之下に列候事

一讀經に諸士拜禮に罷出候節は帶劍之儘に而扇子計所へ取拜禮致候事先年御達有之

一御經終而御年寄中御番頭御用人中御代拜相濟次に又々押返し御自拜有之次に當役拜禮致す先詰前（所カ）に扇子を貰（取カ）御位牌正面に而致中座△之處え參帶劍之儘拜禮又々正面に而中座詰所に着座之事大目付御番方勘定奉行不殘拜禮相濟候はゞ導師始衆僧不殘引次に御三役退座有之候而當役始御勘定奉行迄溜之間へ引取せタ詰之者被罷出居候間御帳等之儀萬端及相談相賴致交代候事

一交代退出之節大師堂へ罷越御年寄中へ懸御目御濟（齋カ）頂戴之御禮并交代屆申上候事此節御政務御預り無之御中老格抔御出席に候はば出入御屆御濟（齋カ）頂戴し御禮不申上候事其節は御用番へ罷越交代致引候趣御濟（齋カ）頂戴之御禮申上候而罷歸り候事乍去始罷出候節は態々爲御屆罷越候には不及事先例之由

一寛政十一巳未五月廿三日化城院樣廿五回御忌御法事有之廿三日朝詰山瀨新左衛門相勤候今日拜禮仕候に付明日拜禮如何可致哉之旨大目付木呂子善兵衛殿へ被問合候處今日拜禮被致候事故別段明日拜禮に者及申間敷旨御帳役へも被爲認候由タ詰之者より同樣相心得明日拜禮に者不及段被申聞之候當時も此振合候

一御取次に而も御用人格之仁相勤候節は小サ刀帶長上下着用之事古例之由既に文政六亥未年十二月十一

日朝詰に而佐藤主膳殿長上下也其後承候處御年寄中へ御伺之上に而被着候由也

私曰此儀如何也

右逮夜朝詰勤向終

一夕詰之者服并供人同斷四つ半時より罷出溜之間に罷在候事朝詰之者は致交代候節御帳之儀致相談候事不殘交代濟候は御赤飯煮染胡麻鹽香物齋出る

但供人若黨は供歸り申付る時罷越候樣申付候事中間は例之通支度相渡候事

一御法事始之半鐘鳴候は御本堂へ相詰候事御經終而拜禮等萬事朝詰同樣別而替る儀も無之候溜へ引御非寺被下置三汁五菜右御禮大師堂へ罷越御年寄中へ申上并引取候趣も申上る

但福井源次兵衛殿勤書には御法事相濟候而出家のもの不罷歸内は引取不申候私曰此儀御者頭に而も兼而より被案候仔細は拙者共引取候得は自然與番人立番等不慎にも相成候而も出家とも察も如何と引取迄罷在候筈に申談候事之由岡村氏物語右出家共退散達方より來る御出家は泊り候旨泰安寺伴僧申聞候間相詰候小頭呼出し火之元等之儀申付候而引取候旨有之候

一御帳役之者は始終玄關に罷在候

御當日朝詰心得

九日

一御當日朝詰迚も別而替候儀無之朝六つ半時出仕萬端御逮夜之通取計候事御粥頂戴有之

一御法事始候半鐘鳴候を相圖に詰候事昨日朝詰之通

一三日町長源寺へ年々御助力米百俵つゝ被下候間爲拜禮罷出る此節は玄關に而取次候而溜之間に引時分御沙汰可申旨申述置茶坊主へ茶多葉古盆爲差出泰安寺役僧へ寺院罷出候間宜時分案内致吳候樣申述置扨拜禮爲致候而宜旨申聞候はば長源寺へ申述此方先に立案内致す○此所に而拜禮爲致候事其内此方は詰所に居る出家歸り候節玄關迄相送る

但御備物等持參候はば則玄關に而取次御帳へ爲相認泰安寺伴僧へ申述献備爲致候且又長源寺伴僧等召連候者是は玄關之片脇へ爲持置可申事

一御城内般若院爲拜禮罷出る玄關に而取次是は矢張玄關へ爲待置前文之通取計拜禮爲致候節者此方致案内●之處に而拜禮爲致歸候節者送り候に不及候

一御本陣小清水庄藏罷出る大方彼は勝手より上り大小も勝手に差置御備物は勝手之者へ相頼直に御備可申候此段兼而伴僧へ承合御帳へ相認候事無腰に而●之處に而參拜爲致候事猶時宜に取付可申事

一御經相濟御名代自拜等相濟衆僧退出御三役御引取後當始勘定奉行迄も溜へ引御齋頂戴有之御禮并御屆

例之通

一御帳出來候者御帳役より受取尤御逮夜朝夕御當日相詰候者引懸けに右御帳御用番へ持參差上候事尤下夕帳も此方へ受取月番箱へ入置可申事

但御在城中に者御帳役へ申付置新御殿御帳と一所に差出候事尤此節は其日〳〵に差出候事也文政八乙酉年十一月御用人中より懸合有之如此取極申候

一御在城中に者殿様御拜禮被遊候其節は當役に而御引反仕候既に文化二丁卯年九月廿六日廿七日了智院様御初七日御法事之節山本九十九致出役候處御上御拜禮有之御出之節御本堂より被爲入御休有之立關より御退出被遊候此節山本氏御引反被相勤文政九戊年十一月に者初後共に立關より御出入尤徒目付帳役者引込居申候

一文政九戊年十一月廿八日廿九日長壽院様七回御忌御法事有之御當日四郎三郎相勤申候其節は殿様初後共御本堂より御出有之候付御取次に而御引反可仕哉之旨長左衛門殿御尋に付其心得に而罷出候旨御答申候所長左衛門殿御年寄中下江源左衛門殿へ御伺有之候處當役に而御引反可仕候様御沙汰之由被仰聞候間初後共に當役に而相勤申候

内御門之外に御引反之由也御小納戸先に出居候間問合御引反致候方宜由なり

御帳上書

文政五壬午年
大隆院様十三回御忌御法事御寺詰帳
七月

御逮夜朝詰

殿様　宮原慶藏
御代拜　瀨尾英之進
白銀三枚　永田五郎太夫
御花一桶　村山勘解由
長壽院様　廣瀨右平
岡谷三太夫

御代拜　福井三四郎
金貳百疋
御前様
御代拜　同　人
金百疋
今井谷
奥様
御代拜　同　人
煎餅
新美八郎
石川八十之進
根岸彌源治
多賀谷助太夫
峰岸伴藏

御逮夜夕詰
七月八日

殿様
御代拜　高山傳右衛門
長壽院様
御代拜　樋山右近
御前様
御代拜　同　人
今井谷
奥様
御代拜　同　人
新居丈之進
後藤早太
村岡彌五兵衛
下江新八郎
廣瀨右平

御當日朝詰
七月九日

殿様　　下江彦太夫
御代拜
長壽院様　　根岸惣兵衛
御代拜
御前様　　同　人
御代拜
今井谷
奥様　　同　人
御代拜
一御菓子　一箱　　病氣に付
長源寺
代僧
向龍寺
諷吟拜禮　　般若院
拜禮

素麺　　小清水庄藏

一御在城中に候者御寺詰御門堅會所御取次右出役之節は前日當日御番引候事
文化八九年之例也

心得增補

一產穢忌中之者伺御機嫌事有之候者出勤後御役宅廻勤可伺御機嫌事勘定所御玄關帳は構無之天保六未年七月今井谷奥様御逝去之節申談取計也尤恐悦事は猶以同様也
但病氣引込者衆候間御一席之內御筆頭に而名代被相勤候此節高山傳之進樋山藤十郎引込也尤廻勤之事は獨禮席差構無之御同役之分は世話番に而勘定所御帳廻勤名代相勤る

右年中行事二卷明治二十五年十一月岡谷繁實藏本を以て謄寫す

年中行事卷之下　終

505
2

山形經濟志料編纂部規程

第一條　本部ハ山形商工會議所會頭ノ管理ニ屬シ山形經濟誌料ノ蒐集及編纂ヲ目的トス

第二條　本部ノ事務ヲ掌理スル爲ニ左記委員ヲ置ク

委員長　一名

委員　若干名

第三條　委員長ハ部務一切ヲ掌理ス

委員長ハ必要ニ應シ書記ヲ任用ス

委員ハ經濟志料ノ蒐集及編纂ヲ擔任ス

書記ハ庶務ニ從事ス

本規程ハ大正九年四月一日ヨリ實施ス

昭和六年三月廿八日印刷
昭和六年四月一日發行
（非賣品）

發行所　山形商工會議所
山形市材木町四三一番地

編輯兼發行者　中山政助

印刷者　坂部藤太郎
山形市旅籠町五四六番地

印刷所　坂部活版所
山形市旅籠町五四六番地
（電話五十七番）

稟告

本誌は山形地方經濟志編纂の目的を以て山形商工會議所の一事業として蒐集せる資料を刊行致し候もの〻にて將來隨時續刊仕度見込に有之候就ては當地方關係の古記錄、各家萬覺帳、古帳簿、古證文、道中日記、隨筆等精粗細大を問はす江湖御所持の各位より當會議所に御貸與被下度切望に堪へさる所に候

山形商工會議所

山形經濟志料編纂部